

聖聡が参照した『大蔵一覽集』

一、はじめに

聖聡は芝増上寺の開祖として知られる、室町期浄土宗の学僧である。今春、私は『室町期浄土僧聖聡の談義と説話』¹⁾を上梓したが、新型コロナウイルスによる疫病が流行し関係寺社や諸研究機関が立入謝絶となったことにより、拙著出版にさいし今後の課題として残した点がいくつかある。本稿では、その課題の一つ、聖聡が参照した『大蔵一覽集』のテキストについて、現在までに得た知見を報告したいと思う。

『大蔵一覽集』は、南宋の紹興年間（一一三二～一一六二）に、陳実が福州東禅寺版大蔵経を対象に、その中の要文一一八一則を抽出し、八部門六十品に分類した仏典類書である。その最終章に禅門列祖に関する記述があることから、本書は禅籍の一つに数えられる。栄西が『興禅護国論』第七大綱勸参門で、『大蔵一覽集』²⁾卷三の一部を引用し、また、栄西の後、応永十年（一四〇三）に

天龍寺雲居庵開版の五山版が発行されていることから、禅籍として流布した書物であったことが推察される。

『大蔵一覽集』の翻刻は、一九三四年に『昭和法宝総目録』第三卷（大正新修大蔵経別卷）に収められ、二〇〇一年には高麗版の影印が『禅学典籍叢刊』第六卷上に収録されている。諸本には、南宋版・元版・高麗版などの舶来版があり、さらに和刻版として五山版・古活字版・近世整版などが知られる。

聖聡が、『大蔵一覽集』を『大経直談要註記』『当麻曼陀羅疏』などで引用し、自著に使う説話の取材源として活用している様子については、前掲の拙著ですでに論じたところである。そのさい積み残した課題は、禅籍である『大蔵一覽集』を浄土僧聖聡がどのような経緯で入手、閲覧したのか、という享受の具体的な実態を探るということであった。この点が明らかになれば室町期浄土学僧が授受していた情報経路の一端を見ることがになり、ひいては関東一帯に点在した各宗の談義所を取り巻く学問的環境を知る手がかりとなることが期待される。

上野 麻美

本稿は、こうした観点から、数ある『大蔵一覽集』の諸本のうち、聖聡が参照したテキストを特定する調査の中間報告である。

二、二つの推論

聖聡が参照した『大蔵一覽集』のテキストについては、前掲の拙著にて二通りの可能性があることを述べたが、ここでその推論を再掲しよう。

前述のとおり『大蔵一覽集』には諸本が多数あるが、入手の難易度から言えば、聖聡存命期においては、舶来版に比して和刻版の五山版の方が手に入れやすい本であったと思われる。『大蔵一覽集』の五山版の刊行は応永十年（一四〇三）で、聖聡がこれを頼用する『大経直談要註記』が成立した永享五年（一四三三）とは年代的にも近い。しかしながら、注意しておかねばならないのは、総じて五山版の書籍は残存数が少ないことから、その発行部数はさほど多くはなかったと推定される点である。³⁾五山版『大蔵一覽集』に関しても、現存完本は石川武美記念図書館成篋堂文庫に蔵されるもののみで残存状況から判断すれば広く流布した形跡はない。したがって本書を入手、閲覽できた人物は禅宗寺院関係者のなかでもごく限られた者であったと考えられる。ましてや、都から遠い関東在住の浄土僧の聖聡がそのような貴重書を入手・閲覽することができたのか、疑問が残る。

また、一方で、関東在住ながら、聖聡が南宋版『大蔵一覽集』に触れる機会を持ち得た環境にあったことも見逃せない。聖聡の

出自である千葉氏の氏寺で、彼が出家した寺とされる千葉寺（千葉県千葉市）には、十三世紀前半ごろ宋に渡り經典の将来や補刻事業に関わった「了行」がいた。⁴⁾よって南宋版『大蔵一覽集』またはその覆刻本や写本が了行の手元にあった可能性は高く、千葉氏縁者で千葉寺出身の聖聡が何らかの機会を得てそれを閲覧することは難しいことではなかったと想像される。

さらに、千葉氏周辺に南宋版『大蔵一覽集』がもたらされた可能性を考えるさいに注目しておきたいのは、千葉氏と金沢称名寺との関係である。鎌倉時代以降、中世の千葉氏の領内には金沢称名寺の所領が点在しており、称名寺僧たちは武蔵国六浦と房総を海路で盛んに往来したよう⁵⁾で、領主千葉氏は彼らの庇護を担ったと推定されている。神奈川県立金沢文庫には、金沢称名寺傳來と推定される、鎌倉後期に南宋版を書写した『大蔵一覽集』が遺ることから、称名寺僧たちが千葉氏の関係寺院に南宋版『大蔵一覽集』をもたらしたという経路、あるいはその逆の経路も検討する余地がある。こうした、聖聡をとりまく地縁血縁的環境を考慮すれば、彼が南宋版『大蔵一覽集』およびその関連諸本を披見できた可能性は否定できない。

三、調査対象とした諸本

さて、右に述べた二つの推論を念頭におき、今回、調査しえた諸本を左に挙げよう。

A…金沢文庫写本 *神奈川県立金沢文庫蔵

宋版一切経所収本。一切経として納められたさいには版本であつたのか、どの段階で写本になったのかは不明。ただし、牧野和夫によりこの写本の底本は南宋版『大蔵一覽集』であつたことが確認されている。⁽⁶⁾南宋版はこの他に、京都高山寺（一部は実践女子大蔵）にも蔵される。

B…高麗版本 *影印本『禅学典籍叢刊』巻六上所収南宋版の覆刻版。⁽⁷⁾序文なし。

C…五山版本 *石川武美記念図書館成實堂文庫蔵

応永十年刊行。元版の覆刻版とされる。⁽⁸⁾他に三井家旧蔵本があるが完本ではなく巻二と巻三及び巻十一末刊記は補写。⁽⁹⁾

D…駿河版本 *京都大学附属図書館（デジタル画像閲覧可）

慶長二十年。銅活字版。徳川家康の命によって刊行された。金沢文庫蔵写本が底本か。⁽¹⁰⁾この他に国立公文書館、天理大学図書館、宮内庁図書寮文庫、東京大学総合図書館、慶応大学斯道文庫、高木文庫にも蔵される。

E…叡山版本 *仏教大学附属図書館蔵（デジタル画像閲覧可）

刊行は元和寛永ころか。⁽¹¹⁾木活字版。仏教大学附属図書館の書誌情報には単に「古活字版」とあるのみだが、東洋文庫蔵（岩崎文庫）の叡山版（木活字版）と比較し同版と判定した。この他、日光天海蔵、京都大学附属図書館、東京大学総合図書館に蔵される。

F…寛永十九年刊本（版元は西田勝兵衛） *同志社大学図書館蔵（デジタル画像閲覧可）

新島記念文庫蔵。整版本。この他、叡山文庫毘沙門堂蔵、京都大学附属図書館、東京大学総合図書館、仏教大学附属図書館、龍谷大学大宮図書館、筑波大学中央図書館、大阪公立大学杉本図書館、静岡県立中央図書館、国立国会図書館にも蔵される。

G…寛永十九年刊本（版元は野田庄右衛門） *早稲田大学中央図書館

整版本。この他、法然院、龍谷大学大宮図書館にも蔵される。

今回、右に挙げた諸本と古活字本『大経直談要註記』での引用文を照合し、用字の異同に注目して分析した。その結果、『大蔵一覽集』諸本間では近いが、それら諸本はどの本も引用文との間が遠いという関係にあることが判明した。また、引用文にある脱文箇所（『大経直談要註記』巻五冒頭近くの「過現因果経」引用部分）はどのテキストにもない。そもそも、『大経直談要註記』原本が所在不明のため、よほど特異な点がない限り、用字の異同や脱文の有無などで二者の影響関係を断定するのは難しい。したがって、管見に入った範囲では、聖聡が参照したテキストを特定することは、現時点では不可と言わざるを得ない。

ちなみに、一切経所収の「版本」の南宋版『大蔵一覽集』は高山寺が所蔵するが、今回調査することは叶わなかった。よって、南宋版を底本とするとされる金沢文庫蔵写本や、南宋版を覆刻したとされる高麗本から推定する他ないが、調査結果から推測するに、高山寺蔵の南宋版原本と照合したとしても、やはり聖聡の参

照したテキストを特定することは難しいと推測される。

また、右に挙げた諸本の他に、元版『大蔵一覽集』が大東急記念文庫（久原文庫旧蔵）に蔵されるが、これも未だ調査が叶っていない。しかし、この元版は五山版の底本であることが判明しており、五山版での調査結果から推定すれば、やはり南宋版の場合と同様の判断となる。

四、浄土宗僧と『大蔵一覽集』

右に述べたごとく、現時点では調査の目的を果たすことはできなかったが、今回の調査によって得たいくつかの知見を記しておきたい。

『駿府記』には慶長十九年八月六日、家康が『大蔵一覽集』を金地院崇伝に献上され、銅活字で開板しよう命じたと記されている。つまり駿河版『大蔵一覽集』の出版は崇伝の薦めによるものであったかのような書きぶりになっている。しかし、それより先に、増上寺の源誉存応（観智国師、一五四四〜一六二〇年）の推薦があったと語る記録の存在を、福井保が指摘している。それは『暁誉源栄覚書』（明治十四年写本。一冊。内閣文庫蔵）と題する資料で、その巻末の本奥書に「寛永八年十月廿日」という書写年月日と「廓圓」という書写者の名が記される。長くなるが、左に該書の『大蔵一覽集』に関する部分を引いてみよう。

慶長十八年八月十三日国師駿府に罷越、主先報土寺へ寓せられけるに、十五日大御所渡御し給ひ、本多上野介、安藤帯刀、

成瀬隼人等御供ある。御目見の時、「仏教は数千なれば、末書も数万なるべし。此度自分活字版を申付、内外二典の内、世上に用ひて益あるべからむを開板申付んとす。外典は道春等に聞とどけ貞観政要、東鑑、本朝世紀等を申付たり。釈氏にては何れの書かよからむや。近日、天海も来るべければ、夫に申付、京都へ遣せ、かれが宗門の内縁につきて、公家門跡より出さしむべければ、かれは彼、国師は国師なれ。自分が戒師は国師なれば、国師に比類すべき沙門日本にあらず。何にても開板の上、僧俗共に仏学にたよりあらむを申出べし」と仰せあり。国師言上すらく「誠に結構、言語同断の御事にて候、我朝仏書開板の始は、浄土門撰択集を始と仕り候へば、日本開板は当宗より先成は御座なく候、さて当今に及び仏学のたよりあらんには大蔵一覽にしくはなく候、其故は此書は震旦にて居士が作にて、一たび全部を開播する時は、先一切経に結縁し、功德を植るのみならず、義学の引証にたよりあり候、又儒者などへ仏教をささむには、首楞嚴経なども宜候、円覚楞伽般若部類は学者の好む書に候へども、まれに板本も見え候、大蔵一覽はいまだ無之候へば、宋本を以活字板となし、此度御定制被下し十八檀林へも一部づつ下し置れなば、当来の幼学のためにも一きは難有こそ存候へ」と申上られければ、上様「いかにもしかるべし、活字板申付、東鑑と同じ日時に出来せば檀林へは寄附すべし」と仰らる。

「世上に用ひて益あるべからむを開板申付んとす」という目的

（『暁誉源栄覚書』¹⁵）

のもと、「僧俗共に仏学にたよりあらむを申出しべし」という家康の要請に対し、存応は「当今に及び仏学のたよりあらんは大蔵一覽にしくはなく候」と答え、これを出版することで生まれる功德や意義を熱心に説明している。

この記事からわかるのは、江戸初期において『大蔵一覽集』が入手困難な書籍であったことと、禅籍である『大蔵一覽集』が聖聡より後の時代においても浄土学僧に高く評価されていたことである。

さて、もう一つ、『大蔵一覽集』が浄土学僧に重宝されたと推察できる例を紹介しよう。早稲田大学中央図書館蔵の寛永十九年刊行本（版元野田庄右衛門）には「海誓大僧正御牌所書籍」という所蔵印記がある。「海誓大僧正」とは知恩院五十八世「海誓祐月」（一七二一〜一八四）を指し、「御牌所」はその位牌が安置された堂舎やそこを管理する寺院そのものをいう。この印記だけでは当該本が祐月の所蔵本であったのかは判明しないが、いづれにしても浄土宗寺院で享受された書であることは疑い得ない。

ここに紹介した二人の僧侶の例により、『大蔵一覽集』は江戸期の浄土学僧にも欠かせない書物として大事に受け継がれてきた様子がうかがえる。禅籍として伝来した『大蔵一覽集』だが、その利用価値の高さに気付き、浄土宗教義の解説にこれを頻用した先駆けは、言うまでもなく聖聡である。浄土学僧たちは聖聡の著書や教えとともに、その拠り所となった典籍も熱心に学んでいたようだ。駿河版発行にさいして、存応が『大蔵一覽集』を推薦した背景には、先学が愛読した『大蔵一覽集』をより多くの学僧た

ちに享受させたいという願いがあったのである。

五、おわりに

以上、報告したとおり、管見の限りでは、聖聡が参考にしたテキストを特定することは現時点では叶わなかったが、今回の調査の過程で得た知見は、聖聡より後代の『大蔵一覽集』の享受をたどるうえで注目すべき示唆を孕むものであった。

前掲の拙著にて指摘したが、本文に「〇〇経云」と出典が明記されていても、原典ではなく『大蔵一覽集』所載の要文を引用した例は、独り聖聡の著作に限ったことではないと推測される。『大蔵一覽集』の駿河版や叡山版の存在を見ると、寺院を中心とした江戸期の流布の様相もうかがえ、当時の僧侶の著作に引用されたであろうことは想像に難くない。『大蔵一覽集』は大蔵経の要文集という性格上、本体である大蔵経に付随する二次資料として扱われてきたせいも、従来見過ごされがちな典籍であった。しかし、駿河版の出版事情を踏まえれば、大蔵経本体よりも広く用いられた仏書であったとも推測される。『大蔵一覽集』は、今後、中世、近世における仏教説話の出典を検討するさいには、まず第一に検討すべき重要な資料となるう。

さらなる伝本の探査により、聖聡が参照した『大蔵一覽集』のテキストが判明し、本書の享受の様子が解明されることを期待しつつ、今後も調査を継続したい。

注

- (1) 新典社、二〇二二年四月。二〇二二年度東京経済学術研究センター学術図書刊行助成による。
- (2) 柳田聖山「栄西と『興禅護国論』の課題」(『中世禅家の思想』日本思想体系16、岩波書店、一九七二年)
- (3) 川瀬一馬『五山版の研究』日本古典籍商協会、一九七〇年三月
- (4) 野口實「了行とその周邊」、牧野和夫「宋版一切経補刻葉に見える「下州千葉寺了行」の周邊」(『東方学報京都』第七三冊、二〇〇一年三月)。野口実「鎌倉時代における下総千葉寺由縁の学僧たちの活動―了行・道源に関する訂正と補遺―」(『京都女子大学研究紀要』二四号、二〇一一年三月)
- (5) 小笠原長和「下総千葉氏と称名寺僧」(『中世房総の政治と文化』吉川弘文館、一九八五年十一月)
- (6) 牧野和夫「日宋の「版刻」を結ぶもの―十三世紀中後期の「補刻葉」に探る―」(『日本文学』五〇巻七号、二〇〇一年七月)
- (7) 柳田聖山・椎名宏雄編『禅学典籍叢刊』巻六上・解題、臨川書店、二〇〇一年三月
- (8) 椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』第一章第四節、大東出版社、一九九三年八月
- (9) 川瀬一馬前掲書第三章第二節
- (10) 福井保『江戸幕府刊行物』雄松堂出版、一九八五年八月
- (11) 東洋文庫日本研究委員会『岩崎文庫貴重書書誌解題』Ⅲ、東洋文庫、二〇〇〇年三月
- (12) 椎名宏雄前掲書附録一「宋金元版禅籍所在目録」。『大東急

記念文庫貴重書解題』第二卷仏書之部。

(13) 椎名宏雄前掲書第一章第四節

(14) 福井保前掲書

(15) 国立公文書館デジタルアーカイブで閲覧。請求番号一六六一〇一二七。翻字については読みやすさを考慮し、現行の表記に改め、適宜、句読点・濁点を付した。

(二〇二二年十月十六日脱稿)

*本稿は二〇二〇年度国内研究員としての研究成果に基づき発表するものである。